

私のフィールド

白い静寂の中で

—— 早出川上流杉川 ——

岡田成弘

ひざまである雪をかきわけ山道を進んできた。昨日からの雪が山々に早い冬の訪れを告げ降り積もった白い雪とそれを被った黒い杉木立が、雪国特有の風景を作り出していた。

春には芽吹きの木々にオオルリが歌い、ミソサザイの囀りが響き渡るこの早出川上流も、今はひっそりと、川の流れだけが静かに時を刻んでいる。

時々、ビッピッと鳴きながらカワガラスが飛んできて、流れを遮るかのようにはエサを探しているが、飛び去ったあとは一層の静寂が広がってゆく。

岸边に降り積もった雪に目をやると、そこには幾重にもノウサギの足跡が続いていた。明け方にでも出てきたのだろうかと思いをめぐらせ、辺りを見渡していると、川岸を望む斜面のひときわ高い木に大きな鳥影を見つけた。急いで双眼鏡を覗く。クマタカだ！その距離約40m。山の尾根を飛ぶ姿を遠くから見たことはあるが、こんなに間近で見るのは初めてだ。白い胸がよく目立つ。長めの尾羽と冠羽、ふくらませた胸の羽毛に幼なさを感じる。どうやら若鳥のようだ。時折こちらを見るが、飛び立つ気配はなく、ノウサギの足跡が続いている岸边をじっと見つめている。クマタカは、待ち伏せの狩りをするといわれ



ているが、ここがその場所なのだろうか。だとすれば、秋に親鳥のなわばりを出てやっと見つけた餌場なのだろうか。

数分後、止まっていた横枝を蹴り、幅の広い翼で風を切るように杉林を越え、川の上流へ飛び去っていった。再び降り出した雪に溶け込むかのように。

また静寂が戻ってきた。しかし、胸の中は激しい鼓動に揺れている。忘れかけていた子供のころの「感動」が今、全身に溢れている。この気持ち、このかけがえのない山河を、我々の時代で断ち切ることなく、遠く未来に伝えたい。

新潟県の鳥類

1. 生息環境

新潟県環境保健部環境保全課

本 間 隆 平

1 自然環境

県土面積 12,578 km²，全国第5位の広さを持つ本県には、これまで330種あまりの鳥類が記録されています。これは全国で記録されている520種あまりの60%程度にあたりますが、各都道府県の野鳥リストで300種を越えているところは、北海道や東京都など数県しかなく、全国第5位の広さを持つばかりといえるでしょう。しかし、広いだけで地形が単純であればそこに生息する鳥類の種類は少なく、いろいろな鳥類が住めるということは自然環境が変化に富み、かつ豊かであるといえるでしょう。

(1) 山 岳

本県は三方を山で囲まれ、北から朝日山地、飯豊山地、越後山脈、三国山脈と続き、南には妙高山塊、飛騨山脈があります。これらの山地や山脈には、ブナの原生林が残っている朝日岳、お花畑の美しい飯豊山、信仰の山・八海山、急峻な岩場で知られる谷川岳、地塘と湿原の広がる苗場山、ライチョウの生息する妙高山・火打山、北アルプス北端に位置する本県最高峰の小蓮華山など著名な山が多く、四季折おりにすばらしい自然景観をつくり出しています。

これらの植物帯についてみますと、丘陵帯には、クリ、ナラなどの落葉広葉樹が多く、低山帯はほとんどブナ林で占められていますが、そのほとんどが下層にユキツバキを伴っています。亜高山帯には常緑針葉樹がほとんど見られませんが、苗場山、妙高山塊、小蓮華山などごく一部の山にオオシラビソ林が見られます。亜高山帯上部に生育するダケカンバも、苗場山、妙高山塊、小蓮華山などにわ

ずかに見られるだけであり、高山帯特有のハイマツは、現在では、火打山、小蓮華山などに小群落を形成しているにすぎません。

(2) 河川と湖沼

新潟県の大小多数の河川は自然環境の骨格となる地形を形づくるうえで極めて重要な働きをし、脊梁山脈に発して日本海に注ぐあいだに、瀑布、峡谷、河岸段丘などを作り、さらに平野を形成しています。なかでも我が国最長の信濃川は、長野県では千曲川と呼ばれていますが、本県に入って谷川岳に源流を発する魚野川などと合流し、新潟平野を蛇行して日本海に注いでいます。また、阿賀野川は尾瀬沼を源流とする只見川が福島県を流れ、東蒲原郡を通り、新潟平野へ出て日本海へ注いでいます。

本県の山地には見るべき湖沼はありませんが、平野部には福島潟、鳥屋野潟、佐潟、朝日池、長峰の池などの湖沼があり、また佐渡には水路が開かれて淡水湖からかん水湖に変わった加茂湖があります。さらに、電源開発のために作られた奥只見湖、三面貯水池など多くのダムが湖の様相を帯びて来ております。

(3) 平 野

新潟県には、新潟平野、柏崎平野、高田平野などの平野が広がっています。これらの平野は山から流れ出す土砂によってできた沖積平野で、いずれも丘陵地帯の前面に展開しています。新潟平野は信濃川と阿賀野川を中心に広がっており、南北100km、東西30kmに及び、その広さは関東平野に次ぐものです。新潟平野はかつて大きな入江となっていたことが、沿岸流によって村上市と角田山との間に弧状の砂州が形成され、その中に上砂が堆積

し、湿原や沼沢地へ姿を変え、今日の新潟平野が形成されました。柏崎平野と高田平野は三階節で知られる米山によって隔てられています。

これらの平野はほとんど水田となっていますが、その水田はかつての湿田から乾田へと変わっております。

(4) 海岸

新潟県はほぼ南西から北東方向に海岸線が続いており、平野が海岸に面しているところではいずれも砂丘が発達し新潟平野には新潟砂丘、柏崎平野には柏崎砂丘、高田平野には潟町砂丘が形成され、佐渡国仲平野には八幡砂丘が発達しています。これらの砂丘にはクロマツやアカマツの海岸林が発達し、近年、ニセアカシアも繁茂するようになりました。

しかし、明治・大正にかけて開削された信濃川の大河津分水による河口の土砂堆積の減少や、天然ガスの採取、地下水の大量揚水による地盤沈下などは、海岸決壊をひきおこし急激に海岸を後退させ、かつて数百メートルにも及んだ海岸砂丘は今では数十メートルまで減少しております。

また、佐渡、粟島、親不知子不知、笹川流れなどの岩石海岸は特殊な生息環境を形成しています。

2 鳥獣保護, 自然環境の保護施策

以上、新潟県の自然環境について概要を述べてみましたが、自然や景観を保護するため自然公園によって、国立公園4箇所（磐梯朝日、日光、上信越高原、中部山岳：面積106,296ha）、国定公園2箇所（越後三山只見、佐渡弥彦米山：面積81,928ha）、県立自然公園13箇所（面積140,164ha）が指定されています。また、鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律によって鳥獣保護区79箇所（面積119,721ha）が設定され、さらに自然環境保全法によって自然環境保全地域20箇所（面積2000ha）が指定されています。

こうした新潟県の自然とその保護施策の中で330種あまりの鳥類が記録されていますが、忘れてならないものとして、それらをよく観察し、よく記録し、よく整理する人達、この三拍子がそろっていたからこそ、新潟県の鳥類について資料が整っているものと思います。



高谷池から火打山を望む

——事務局——

今回から「新潟県の鳥類」と題して、本間隆平博士にシリーズ執筆をお願いした。

御多忙のところ、むりに先生におひきうけいただいた。先生は鳥類の保護、調査研究など、これまでの出来事、文献等の紹介、今後の課題についてざっくばらんに書いてみるとおっしゃっていた。

記 滝上

鳥の世界をたずねる楽しみ

石 部 久

生物の繁殖とさまざまな巢

生物の世界では、今、繁殖期を迎えている。いずれもあらゆる場所を利用して子供を育てることに懸命だ。

生き物の二大原則に、自分の生命を維持することと、自分の種、すなわち子孫を残すことの二つがあげられる。この季節は、種族維持に、全生命力をかけ壮絶な展開がくり広げられるわけだ。

1年中子供をうむニワトリやジュウシマツをのぞいて鳥もこの時期すべて子育てに入る。いずれも他の動物にみつからないよう、懸命に巣場所の選定や位置を決める。

巣は人間でいうハウスではない。家の感覚は、まったくないのだ。人の世界でいうなら、巣は産婦人科病院の産室と保育室にあたるというほうが適当かもしれない。だから小鳥の場合、卵をうんでヒナを育て、巣から出せば、二度とその巣へもどってくることはない。むしろ巣はヘビやイタチ、その他の動物にねらわれる危険が大きいことから、巣立ったヒナたちを親は素早く離れさせる。

スズメは、家のちょっとしたすき間に、ウグイスは山間部の笹ヤブの中に、カワラヒワは街路樹や庭木の植え込みの中に、メジロは低木林のヤブの枝の又に、いずれも嘴だけで、きれいなオワン型の巣をつくる。巣をつくらぬ鳥もいる。岩や土のくぼみに、ハヤブサの仲間やキジの仲間は、らんぼうに卵をうむ。

卵はころがりやすいところのものは、決まって一方が細く一方が太い変型のかたちをしていて、ころがらないようにできている。木の洞に卵をうむクロウなどは、ころがり落ちる心配のないことから、丸いピンポン玉のような型をしている。自然の中でうまく生きるための型をみごとにそなえたものだと感心してしまう。

鳥の歌の科学

毎朝、夜明けとともに歌う鳥たち。だれもがそんな朝を知っているはず。庭先のスズメでさえ、乳白色の朝モヤの中ではさわやかなめざめを感じさせてくれる。

日曜日など野山へでかけてみるといい。早朝五時頃、山道を散歩するとホオジロやオオルリの声が聞える。

「一筆啓上仕候」とか「源平つつじ白つつじ」、または「サッポロラーメンミソラーメン」などと聞きなされ親しまれているホオジロは、一日二千回ほどを歌いくらす。独身の雄ではその倍の四千回ぐらいさえずる。

よくみるときれいな羽色をした小鳥たち。きれいな美しい声でなく小鳥たち。どうしてこんなによい声でこんなにたくさん歌うのだろうかと思議に思ってしまう。

我々ホ乳類と鳥たち鳥類とでは、ずい分と生活がちがう。ホ乳類は嗅覚をたよりに地上を歩き、特に夜の世界を舞台に活動を展開している。暗い世界では色などわからない。だから獣は皆色が大体にている。体臭をきわだたせ、そこここにこすりつけては仲間との連絡をはかっている。ところが鳥は翼をもち空の世界を手に入れた。広い空間で生き、自分の種族維持をはかるためには、目を発達させ視覚をたよりに活動したのである。鳥の羽毛はいろいろだ。双眼鏡でみた鳥の美しさは忘れられない。あの美しさをよりどころに自分達の仲間を広い世界からみつけ出さねばならなかったのである。だから鳥は本当に目がいい。鳥目などというのもうそである。鳥の中でも小鳥類は特に美しい声をもっている。温度差がなく、食べ物の虫もたくさんすみ、自分の体を守ってくれる森での生活は、目で仲

間をみわけするにはあまりに緑が美しすぎる。そこで歌を發達させ、大きな声で連絡をとりあうようになったのだ。長い鳥類の歴史があるのだからかな歌声をつくり出したことを想い鳥のさえずりを聞いてみたい。

鳥のヒナ

どんな生物でも幼ないものはかわいい。それ以上に、たいへんな世話をしなければならぬ。世話をしない生物、産みっぱなしの生物は、子育てをしないかわり、すごい量の卵を産む。五千とか一万五千とか、その数はヒトと比べると比較にならないだろう。体外受精をする動物、魚、カエルなどである。体内受精をする哺乳類や鳥類では卵の数がずっと少なくなる。鳥の中でも例えば、オンドリはメスが卵をあたため、ヒナを育てるので夫婦関係もオスが子育てに加わらない。しかしオスの仕事もきちっと決まっている。続けなければならない夫婦関係の動物もいる。動物の中でも鳥には夫婦関係をもつものが多い。鳥は、空を飛ぶ動物だ。だから一度に卵を全部産みおとすことはできず、毎日一個ずつ産む。五・六個産むと親鳥があたため始めるのだ。親鳥のもつ42度ほどのほどよい体温で卵は、あの中の中で鳥になるための細胞分れつを始める。そしてまもなく赤はだかのヒナ鳥が生まれるのだ。目も見えず、羽も何もはえていない。ただ力なく動めくだけのヒナを親鳥は必死であたため、エサを与え注意深く、かた時もはなれない。もしはなれれば寒さでごえ死んだり、巣から落ちたりするヒナがすぐにでてるだろう。そして自然界は、食うものと食われるものとの常の攻防がある。親鳥のいない巣は、たちまちおいしそうなエサとして他からねられる。そこで一羽の親鳥がエサ運び、外敵からの防衛にあたる。スズメなどの小鳥ならば卵で二週間、ヒナ鳥の期間が二週間で巣立ちを迎える。人間も本来は夫婦で子供を育てる仕事分担があったにちが

いない。鳥の生活を知り、本来のオス、メスの役割を考え、子育てにあたりたいものだ。

カッコウとオオヨシキリ

生物をみていると、人間よりもはるか長い歴史を生きてきた生き方に生きぬく知恵というものが細部にわたりプログラムされていることを感じさせられる。

それにくらべ人間とは、自己のもつ生命をすばらしくとか、美しく、意義あるものに、より価値の高いものになどと常に文化を形造ってきた例外的生物としてみる事ができる。あのすさまじい生き方をするカッコウのさえずりでさえ、人の耳に入ると、初夏をよぶ牧歌風の歌声になってしまう。他の生物に遊びはない、すべての反応、行動は生きぬくためにどうしてもそうしなければならなかった理由があったのだ。遊びは一部の高等動物にだけみられる文化創造の前のさざなみなのだ。

カッコウのタカのような羽の色も、オオヨシキリのめだたない草色も、自分の生きる目的にもっともあったものとして身につけたにちがない。カッコウの卵はオオヨシキリの卵と区別できないほどよくにている。オオヨシキリの親はカッコウに卵をうみおとされても、気づかず温める。14日ほどでかえるオオヨシキリのヒナたちの少し前に、後からうみおとされたカッコウの卵が先にヒナになるのだ。その時目もあかず、毛もはえていないカッコウのヒナの最初の仕事ははじまる。だれからも教えられないで自分の体にさわったものは、すべて巣の外へおし出してしまうことだ。一つのこらずオオヨシキリの卵は外へ出され、自分一人でオオヨシキリの親からエサをもらう。かなしいことに鳥たちは、自分の子供をみわけることなどでできないのだ。ただ赤い口、嘴の黄色い色をみってしまうと、どうしてもエサを入れたくなってしまう本能しかない。大きく育ったヒナは、ある日、遠くで呼ぶカッコウの声にひかれ、育ての親とわかれをつけるのだ。私たちは情感のなかで自然を感じながら、きびしく、さびしい野生のさけびにも心をむけたいものだ。

初冬の朝日池探鳥会

小林 成 光

朝日池から見る景色は、もう初冬の色である。米山の色、近くの村や水田の色、ゴルフ場の芝生の色、みんな煩わしい冬の訪れを感じさせる枯れた悲しい色を持っている。そんな物悲しい景色の中で、辛い冬の訪れを一番早くに感じさせるはずの朝日池の水鳥のいる景色が、一番和むのは、なんとも不思議である。

60年12月25日、くもり。AM10:00~12:00
朝日池~大池探鳥会。参加者県内外から35名。テレホンカード販売も未購入者全員から即時買入れて頂く最良の結果となった。

探鳥結果、(朝日池) マガン(7)、ヒシクイ(50+) オオハクチョウ(5)、コハクチョウ(3)、ヨシガモ、オカヨシガモ、トモエガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、カルガモ、コガモ、マガモ、ホシハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カンムリカイツブリ、



冬空にはばたくマガンの群

カイツブリ、ハジロカイツブリ

オジロワシ(2)、トビ、ユリカモメ、アオゲラ、ヒバリ、タヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、シジュウカラ、カシラダカ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、カケス

(大池) オオタカ(2)、カンムリカイツブリ、カルガモ、マガモ、他 合計37種

月例鳥屋野潟探鳥会

吉 井 進

4年間に159種の鳥類を記録した県下最大の湖、鳥屋野潟、県都の南側に位置し面積約180ha、東西4km 南北1km、湖周12kmに及ぶ沖積湖であるが、湖面を取り囲むように田畑、草原、宅地が広がり地形的、植生的にも複雑で幅広い環境をもち年間を通し私たちは多くの鳥を観察して来ました。

今年1月より県支部では従来の定例探鳥会に加えて月例探鳥会として毎月第二日曜日の午前9時と日時を決め探鳥会を開いて来ました。幸い県立自然科学館の理解も頂き、雨天時等のスライド上映などを行い、初心者の方が鳥屋野潟を通し自然と鳥たちの姿を見て興味を持っていただきたいと考えています。新

入会員の方々やあまり探鳥会に出られない方々も支部の定例探鳥会が春の探鳥会、秋のシギ、チドリ、冬鳥ガン、カモ、真冬の日本海探鳥会の4つだったことで、中々参加する機会も少なかったと感じられました。現在まで1~7月の7回の探鳥会ではほぼ10~20人の参加者で、定例の探鳥会の50~60人の時よりも、聞きたい事や質問などもよく聞かれています。また、年間を通し、鳥たちがどのように鳥屋野潟にかかわりあっているのか? 鳥たちにとって鳥屋野潟はどのようなものなのか? 鳥たちは鳥屋野潟をどう見ているのか? 興味は尽きることがありません。例えば5月の初め

めに渡って来たばかりのオオヨシキリは、ヨシの中ごろに潜み あまり鳴かないので目立ちません。6月はヨシの先で高らかに初夏を歌い 8月頃には、あぶれ雄を除き巣立ちビナと共にひっそりとヨシの中で生活しています。その時、その季節で様々な鳥が色々な形で鳥屋野潟を利用します。春の一時だけ、オオルリ、キビタキも姿を見せます。種類数にすると、湖面の鳥：カイツブリ、ガンカモ、カモメ、アシサシなどの仲間が 41種、陸地の鳥：ワシタカ、カラス、ムクドリ、スズメ、ホオジロ、ツグミなどの仲間 54種、ヨシなどの水辺の推移帯での鳥：サギ、クイナ、ヨシキリ、シギ、チドリを含め44種となります。これらの中から私たちは、よく見られる種を一つ、月のテーマとして、取り上げています。その月の鳥屋野潟の様子、鳥相と共に、そこに代表される種を通し、私たちの鳥屋野潟をみつめてみたいと考えています。必ずしも鳥の多い時だけではありませんが、雨天晴天を問わず行いますので、「あなたの



キジとヒシクイ

見たい季節の鳥屋野潟をご覧ください。最後に月ごとのテーマの鳥と、これからの予定を参考にご覧下さい。

【テーマの鳥】

- 3/9 オナガガモ
- 4/13 ムクドリ
- 5/11 オオヨシキリ
- 6/8 カッコウ
- 7/13 コアジサシ
- 8/10 アオサギ

【予定】

- 9/14 モズ
- 10/12 ヒシクイ
- 11/9, オオハクチョウ
- 12/14 カンムリ
カイツブリ

【参考資料】

支部報 No. 20

野鳥研究 鳥屋野潟とその周辺の鳥類

探鳥会報告

春の総会・探鳥会

事務局



山々に雪もまだ消えあらん 5月17日,18日, 南魚湯沢町で春の県支部総会・探鳥会が行われました。総会では事務局の方から、60年度の決算, 61年度予算計画や, 60年度事業報告, 61年度事業計画等が, 報告されました。スライドでは支部長よりタイでの南国の鳥の話があり, 木下先生からは, 明日の探鳥地のくわしい説明がありました。岡田氏のスラ

ドでは珍しいアラスカでの鳥, また鳥に限らず自然, 魚といったものも紹介されました。タイ, アラスカいずれも, 我々がまだ見ることのできない美しい鳥たちの話, とても心ひかれるものがありました。翌朝は 6時から 魚沼スカイラインを登り, 途中で車を降り残雪がまだあちこちにみられる 当間山の北斜面を展望しながら大沢峠に向けて 散策しました。新緑のブナ林の奥からキビタキや, ジュウイチ, オオルリ, ホトトギスなどの声が聞かれ, ジュウイチが 鳴きながら頭上を飛ぶ姿はいまも目に浮かびます。また, 山頂からはノスリ, サンバなどの飛翔が塩沢の町と共に眼下にみられ, 遅い春の訪れをつげるブナ林はわれわれに素晴らしい1日をプレゼントしてくれました。

